

# 火星



平成15年12月号

# 四大抄

山尾玉藻

木の実降る向う猩々笑ひけり

青空を濁さぬやうに秋の蛇

火祭のはじめ熊笹にほひけり

火祭の桶に榊のあふれあり

火祭のもどり吊革つめたかり

実椿に日当つてゐる離宮門

鶏頭の昼の湯音に枯れそめぬ

十二月葬儀屋の荷に竹箒

霜の香の白川に入る日暮かな

晴れ渡るとは茶の花の金の薬

# 火星作品 山尾玉藻選

足音を待ちぬし虫の鳴きはじむ  
明石 戸栗末廣

葡萄の露ぶだうの色にこぼれけり  
白桃のひかりをまとひ沈みあり  
栗虫の温厚な貌ころげ出づ  
猪現るとぶつきらぼうに言うて過ぐ  
月の寺時計ゆつくり鳴りにけり  
大和郡山 城 孝子

夢殿の昏れ曼珠沙華の昏れ  
朝顔の地べたに咲けり涼新た  
コスモスに風来てコスモスになりし  
一葉落つ一葉の影をつくりつつ  
朱の色のちよんと奈良絵の秋扇  
宝塚 杉浦典子

露の野を戻りし靴が真ん中に  
秋蝶を連れて帰りし庭師かな

鯛雲いつもどこかがこはれをり  
ひよんの笛吹かせてくれるだけなりし  
大文字消えたるあとの煙草盆  
盆過ぎの糺の森の風の  
前を跳ぶばつたに歩幅狭めたる  
作務僧の流し目南蛮ぎせるかな  
うかららのまなこに白膠木紅葉かな  
かりそめの雨に花火師濡れてをり  
手花火の仕事半ばの手でありし  
かまつかや白髪の兄の吹かれをり  
大頭鮎の仕掛けをつくりをり  
零余子めし無職の兄が良く食べる  
手鏡に顔ずらし見る雁のころ  
いつたんは捨てし小机月の縁  
鳥渡る伸びては縮み錢の笥  
鶏頭の一列暗む邸の畑ばた  
足半なの脱ぎ揃へあり朝の露

八幡 吉田島江

神戸 深澤 鱧

藤井寺 戸田春月

# 選のあとに

山尾 玉藻

いるが、いかにも斑鳩の里らしい景である。

朱の色のちよんと奈良絵の秋扇 杉浦 典子

軽いタツチの「奈良絵」は扇などに描くのに向いているのであろう。「朱の色のちよんと」がまさしく奈良絵なのである。快い音感の表現も「秋扇」の趣に相応しい。恒星園作品に「秋咲くや声だんだんに低くなる」があるが、季節の移ろいをしんと捉えており、質としては此方のほうが上かも知れない。萩の頃の「声」を「だんだんに低くなる」と捉えたのは、微妙で繊細な詩心である。

手花火の仕事半ばの手でありし 深澤 鱈

「仕事半ば」を作者自身とすればデスク仕事の途中と見ても良い。または夕飯あとの洗い物の途中の奥様と想像すれば濡れた手が生きてくるかも知れない。一家庭にありそうな一齣を巧く掬い上げている。

手鏡に顔ずらし見る雁のころ 戸田 春月

「顔ずらし見る」は現実の暗さによるものであるが、むしろ「雁のころ」のやや寂しい心の暗さを受け取るべきであろう。さりげなく述べているが季節感は充分にある。

白桃のひかりをまとひ沈みあり 戸栗 末廣

山水を受けた桶の中に沈んでいる「白桃」を想像すれば良い。「白桃」の「ひかり」は他の果物が沈んでいるひかりとは根本的に違う。桃特有のあの産毛のような表皮が水泡となっている「ひかり」である。「まとひ」には自ず光り出した「白桃」が見え適切である。同時発表作の「足音を待ちぬし虫の鳴きはじむ」は表現の妙で一句に仕立て上げているが、充分に納得させるだけの力がある。

夢殿の昏れ 曼珠沙華の昏れ 城 孝子

未だに法隆寺だけは斑鳩の里の田畑に囲まれた趣を呈する。その里には四季折々の花が咲き、「曼珠沙華」もその一つである。「夢殿が昏れ」「曼珠沙華が昏れ」は、昏れ方の色の対比を言いたいのではない。「夢殿」に誘発されるようにすぐさま「曼珠沙華」も昏れてゆくのである。風景を一点に切り取って

謝らぬ母の足拭く良夜かな 大山 文子

「足拭く」で解るように作者のお母様は病氣療養中である。思い通りに体の動かない病者はややもすると我儘になりやすい。「謝らぬ母」も善悪は解っておられるのである。ちよっと悲しい俳諧であるが、「良夜」で美の世界に高めている。

藁塚や湯中りのごと月の出て 嵯峨根鈴子

この句は一点「湯中りのごと」の比喩が面白い。「藁塚」の頃の秋気と言えば爽やかに澄んでいるのが普通である。しか「湯中りのごと月の出て」には、間違ひなく霜がかかっている景を想像させられる。成功した比喩と言えるであろうが、季語に一考の余地があるかも知れない。

ゴンドラの影の下ゆく九月かな 丸山 照子

大阪梅田に在るように現在「ゴンドラ」は都心にも増えてきた。しかしここでの「ゴンドラ」はやはり辺りに建物がない、ゴンドラ」の影と共に自分の影も自覚できる空間が在った方がよい。前にも述べたとと思うが「九月」と言う季語は比較的懐が深い。秋意や秋の愁の他、秋の胎蕩感を感じさせる季語である。秋意や秋の愁に比べ、「九月」には意味性が無くてむしろ具象的な季語と言える。「九月」と言う季節感が充分に感じられる佳句である。獅子座作品のへ放課後の廊を真つ

直ぐばつた跳ぶも景が率直に入つてきて良い句である。

上棟の祝詞にとんぼふゆるふゆる 米澤 光子

へとまればあたりにはふゆる蜻蛉かな 汀女があるが、掲句も同じ目線の句である。「蜻蛉」の在り様とはこう言うものなのであろう。しかしこの句の手柄は「祝詞」にある。今までざわついていた場が「祝詞」が始まる事によつて静かになつて来たのである。見るとはなしに宙を見ると「蜻蛉」が飛んでいた。目を凝らせばそこら中に飛んでいる。まるで「祝詞」の声によつて殖えてきたようにも思える。しっかりとした写生の眼を踏まえた俳諧味もある句である。

朝刊の上の鳥籠 台風裡 元田 千重

気候的に大雨や台風でもなく良い日和を日常とすれば、台風の日是非日常と言える。日常の中では「朝刊の上」に「鳥籠」は無く、台風の為に移動させられたのである。わざわざ用意された新聞ではなくその日の「朝刊」であれば、それほど大きな台風でない事も想像できる。目線をずらし成功した「台風」の句と言えよう。

(以下略)

差知子俳句鑑賞

焚き口を舐めて冬夜の風呂焚く火 差知子

〔岡本差知子句集〕より 昭和六十一年作

現在は電力が瓦斯で沸かすが以前は薪などを使った。寒夜などは火の色を眺めながら温かい風呂焚きを楽しんだ。時代が変わると理解できない句になってくる。

(千枝子)

玉藻俳句鑑賞

日当つて文旦の家しづかなり 玉藻

〔火星〕平成十五年一月号より

先ず木に生る幾つかの大きな文旦（朱欒ともいう）の色が鮮やかに見えてくる。「文旦の家」に親愛感がこめられて、「しづかなり」と結び、さらりと気負いがなく詠まれている。

音の無い時の止った一枚の絵画を見る思いである。

(春月)

# 恒星巻

浜口高子

峡畑の石のいろいろ鳥渡る  
秋出水二階の窓の開きぬたり  
鶏頭の畦の果の水の音  
仰向きに落ちし芋虫十六夜  
月明の暈を這へる放屁虫

長屋璃子

長き夜や余生と云ふを持て余し  
油点草先師好まぬ花なれば  
皿白磁葡萄太古の彩こぼす  
青ぶだう一と日くもり日飢餓もなし  
秋の海戦艦見たる白昼夢

深澤鱻

野分後テーマパークに集ひけり  
ジュラシックパークに吹かれ破芭蕉  
鬼やんまジョーズの波に飛来せる  
恐竜にあぎとありけり秋の屋  
ユダのごと約束の地の曼珠沙華

野澤あき

宿坊の満室となる草雲雀  
秋の日の昼を灯せる刀傷  
幕末のワイングラスや月明り  
秋陰や揚屋に遺る蕪村の絵  
墓地にする交通整理秋彼岸

松たかし

鯉跳ねて三日月の角とがりけり  
みなもとは火の山鮎の落ちにけり  
榎櫃の実甘やかされて育ちたる  
大花野百の恋文もらひけり  
月祭るみづかげろふに水の音

# 獅子座

山尾玉藻推薦

沖汐妙子

雨風の一日のあとの虫しぐれ  
虫の音の雨に変わりし机かな  
明け方は宵よりさびし虫の声  
足もとへふとん掛け替ふ虫の夜

丸山照子

高尾豊子

放課後の廊を真つ直ぐばつた跳ぶ  
新涼や蓄音器より越後獅子  
人込みのひとりひとりに揚花火  
稲架棒やまつさかさまに波頭

田中みゆる

長田曄子

ちんちろりん公会堂に落語果つ  
中崎の旧灯台や月上る  
稲妻の走る播州男山  
秋日傘犬にひそひそ話かな

森茂子

高松由利子

根つ子ごと丹波枝豆とどきけり  
沢蟹のバケツを飽きず子の覗く  
墓井汲む手桶の水の澄みにけり  
猫じやらし手脚の長き隣家の子

木霊のたちたり洞の月あかり  
ましら酒縄文太鼓の軽き音  
修復の材積まれありこぼれ萩  
小上がりに露湿りの靴揃へけり